

東北大学消費生活協同組合第二代理事長  
東北大学農学研究所教授

## 坂本 正幸

多くの生協活動家を育てた  
心優しきリベラリスト

【さかもと まさゆき】

- 
- 1908(明治41)年 1月15日、北海道釧路町  
(現釧路市)に生まれる
- 1932(昭和7)年 北海道帝国大学農学部農業生物  
学科を卒業後、北海道帝国大学副手
- 1947(昭和22)年 東北帝国大学助教授
- 1950(昭和25)年 東北大学教授
- 1952(昭和27)年 東北大学農学研究所所長
- 1960(昭和35)年 東北大学消費生活協同組合  
第二代理事長
- 1971(昭和46)年 宮城県民生活協同組合理事長
- 1981(昭和56)年 5月4日死去

## 農学研究所の存続のためにはたらく

終戦から二年が過ぎた五月、仙台にひとりの植物病理学者が赴任してきた。

学者の名は坂本正幸。北海道帝国大学農学部で稲熱病の研究を行っていたが、東北帝国大学農学研究所に欠員が生じたことから助教として招かれたのだ。

戦時中の重苦しい空気から解放され、研究者の階段を精力的に昇ろうとしていた時期だった。「病理学の研究者を」と請われての赴任でもあった。復興途上の仙台の街は坂本の眼にどう映っただろう。坂本は、多くの学生たちを教え育てながら、三三年もの歳月をこの地で過ごすことになる。

赴任した坂本を待っていたのは、農学研究所（以下農研）の存続問題だった。

東北帝国大学は一九四七（昭和二二）年四月に農学部を設置、一〇月に新制の東北大学への移行を控えていた。農学部ができるなら農研は不要との農研廃止論に、研究所員たちは異を唱える。職員組合もこの問題を探り上げ、農研に來たばかりの坂本を委員長に選出して存続運動を展開した。

農研の存続問題はその後もたびたび浮上し、昭和二六年一二月には農研の予算が大蔵省の案から削除されたとの話を聞きつけ、坂本や当時の所長が文部省と大蔵省に復活の陳情をしている。

昭和二七年、農研の所長に就任した坂本は、実験機械の充実や農場の集約など研究

体制の整備を進める。周囲の信頼を集め、昭和三〇年、さらに昭和三三年と続けて所長に再任される。『東北大学農学研究所二十年史』には、坂本の再任について「農研存続を一そう安定的なものにしたいという所員の念願が坂本所長に寄せられたためであると考えられる」と記されている。

農研という弱い存在を守るために坂本は懸命だったのだろう。そしてそれは生協運動への温かい眼差しにつながるはたらき方でもあった。

## 教職員、学生がともに運営する自治組織へ

昭和三五年、坂本は東北大学消費生活協同組合（以下東北大生協）の二代目理事長就任を依頼される。

初代理事長の中川善之助教授が定年退官することになり、学内の教授陣のなかから「学生とともに大学生協運動をやっていただけのような先生を」と学生たちが坂本の名前を上げたのだった。坂本は「僕は適任じゃない」と一度は依頼を断るが、その後就任を承諾。理事長に就いてからは「生協のことを勉強する」と言って週一回の常任理事会と月一回の理事会に欠かさず出席し、専従役員（以下専従）や学生たちを感激させた。

会議の席では「俺はシャッポにすぎない。きみたち専従と学生が主になって運営し

なさい」とほとんど発言しなかったが、農研所長であり大学評議員でもある坂本の理事会出席は、他の教授理事や大学当局職員への重石にもなった。

東北大学生協の第五代専務理事を務めた高木三男の脳裡には、理事会に出て会議を見守る坂本の姿が強く刻みつけられている。

「大学には学生の自治会、教職員の組合、大学院生の協議会と階層ごとに組織があるが、生協は全学を網羅する唯一の組織でした。坂本先生は、教職員も学生もみな対等に生協の運営について話し合う、オープンで民主的な方向に東北大生協を持っていきたいと考え、理事会で身を持って示された」

一九六〇年代の大学生協はまだ、学生のための組織だった。

六〇年代後半頃から、東北大生協は大学院生や教職員も含めた全学の協同組合へと再編を図る。教職員の組合加入を推進し、教職員独自の組合員組織をつくり、東北大学に学び働くすべての人々の手で運営される組織へと東北大生協を成長させた。それは坂本が示す、大学の全階層を網羅した自治組織、という方向と合致するものでもあった。

後年高木は、坂本が専従や学生とどのような関係を築こうとしていたか、あらためて知ることになる。次期理事長について話し合ったときのことだ。

「細かいことに口を出し過ぎて専従の仕事がやりにくくなるような理事長では困るし、学生とはフランクに話し合える人でなければな」。そう話す坂本に、高木は「そ

うした配慮の上に私たちを指導してくださっていたのかと、頭の下がる思いがした」という。

## 学生の厚生施設に、こころも熱心な先生がいたとは

川内キャンパスは、戦後しばらく駐留米軍のキャンプ地だった。昭和三二年、東北大学に移管され、翌年、川内分校・川内東分校（現教養部）が置かれた。当初は、宿舎やチャペルなどの米軍施設をそのまま校舎や講義堂に利用していた。洋式トイレのモダンな建物もあったが、なかには馬小屋の跡と見紛うばかりの粗末な建物もあった。昭和三〇年代の川内の厚生施設は、その粗末な建物内に小さな食堂と売店があるだけだった。「収容人数が少ないので毎日外まで長い行列ができた。雨の日は傘をさして待たなければならぬし、売店と言ってもパンや牛乳を扱っているだけだった。片平地区の厚生施設も似たようなものだった」。

劣悪な環境に、厚生施設の改善・拡充を求める声が高まり、東北大生協はデモや集会で訴えた。昭和三〇年には青葉山移転統合計画が明らかになり、運動はさらに拡大。昭和三二年には「すべてのキャンパスに、恒久、厚生施設を」のスローガンを掲げ、厚生会館建設運動に乗り出した。

「食堂などはとにかくひどかった。そのひどい状態をみんなの共通認識にして話し

合うわけです。食堂を広げよう、新しい会館をつくろう、と。要求を顕在化させ、組織化して運動にしていけば大衆的な広がりを持つ。大学当局も文部省も動かすことができる。そうやって要求を少しずつ実現してきたのです」

高木たち生協の学生や専従が何より心強かったのは、理事長である坂本が運動を支持していたことだった。

坂本の定年退官を記念して編んだ『坂本先生を送る』に、阿部武弘教授理事が思い出を書いている。

—まだ教養部の講師だったころ東京の宿泊所で坂本先生と相部屋になった。少し酔った坂本先生は夜中の一〇時から約二時間、教養部の厚生施設や大学の在り方について講演を続けた。こうも学生の厚生施設等に熱心な先生が居られたのかという印象を強く受けた（要約）—

学生たちの要求を形にするため、他の教職員にも支持者を広げようとしたのだろう。昭和四五年、こうして教養部に待望の厚生会館が完成した。東北大学生協はその後も運動を継続して文系厚生会館、農学部厚生会館などの施設を獲得し、教育環境の充実を図っていく。

## 弱者の側に身を置く、リベラルな人

坂本は徹底して大衆運動を重視した。坂本の退官の辞（『坂本先生を送る』）から一部を引用しよう。

―生協の志すところが『平和な豊かな生活』にあることは云うまでもない。また誰しもこれを希わないものはあるまい。この理想に一步一步近づいたためには、生協を一つの運動体として把えてゆかねばならない。この運動は資本の論理、つまりその具体的顕れである政治との間に対立を生み出す。組合員の生活の砦となるためには、安価な品をただ供給するだけに留まらない。消費者運動を組織してこれとたえず戦ってゆかねばならぬ。多くの力を結集して戦えるか否かに生協運動の発展がかかっている。

大学の民主化運動や授業料値上げ反対闘争でキャンパスが騒然としていたときも、坂本は学生たちの要求によく耳を傾けようとした。「正当な要求は大衆運動として取り組んでいかなければならない」とする坂本にとって、学生たちを信頼し、気持ちを汲み取ろうとする努力は当然のことだったのだろう。

「坂本先生は一言で言うとりベラルな人だった。つねに弱者の側に身を置き、その信念を貫いた」と高木は言う。

特定の党派とは距離を置くが、組織の必要性や大衆運動の重要性についてよく考え

ていて、「それなくしてモノゴトは進まない、だからあなたの方学生がしつかりやりなさい」と学生や専従たちを導いた。施設を拡充したいと要求すればその運動の進め方について示唆を与え、生協運動を地域の消費者にも広げようと発想すればその考えを全面的に支持してくれた。

学生や専従たちにとって、坂本をはじめ代々の理事長はみな仰ぎ見るような知識人だ。「世の中や人間について見識を備えた先生たちがバックボーンとして構えてくれている、それがどれだけ大きな支えになったことか」。そう高木は述懐する。

## 一人の友人として学生と接し、意見を尊重した

坂本は生協運動の行く道を照らすだけでなく、議論と実践を通して多くの生協活動家を育てた。

仙台の繁華街の横丁に「源氏」という一杯飲み屋がある。昭和二五年、坂本が東北大学の教授に昇任したのと同じ年に開店した小さな居酒屋だ。酒が好きな坂本は、常任理事会などの終了後、よく専従や学生を連れて源氏の縄暖簾をくぐった。静かに飲みながら、みんなが自由に発言するのを聴いていた。議論が激しくなっつてつい大きな声を出しても叱らなかつた。

しかし、バーなどに行つて専従や学生がそこで働く女性にぞんざいな言葉を使った



りすると、「女性はそれなりの事情があつてここで働いているんだから、お客面して横柄な態度をとるんじゃない。働く女性としてきちんと遇さなければいけない」とたしなめた。研究室でも「お茶汲みを女性の仕事と決める必要はない」と言い、自らコーヒーを入れて配った。

師弟を超えた交流は温かく生氣に満ちたものだったろう。

「多くの人たちはそうやって先生の人柄に触れ、生協運動を続けようという気持ちになり、志を抱いて全国に散らばっていった。先生の影響で日本の生協に多くの活動家が生まれた」

それは高木が二〇年にもおよぶ坂本との交わりを通じて得た実感だ。

東北大生協の第四代専務理事を務めた内館晟は『坂本先生を送る』で坂本に次のような謝辞を送っている。

―坂本先生はいわゆる先生としてではなく、一人の友人として私たちに接してくださいました。そしてはるかに年少者である学生の意見も尊重し、学生たちの意見を無視して学校当局との交渉で独自の行動をとられるようなことは、けっしていたしませんでした。先生自ら民主主義を守る手本を示してくださいました。―

一九六〇年代の東北大生協の若者たちは、耳を澄まさなければ聴こえないほど小さな声で話す坂本の話にじっと耳を傾け、背中を見ながら育った。

東北大学を定年退官した後は、東北大生協から宮城県民生協を立ち上げた内館や高

木たちの依頼に応えて第二代理事長を務め、発足間もない地域生協を支えた。

晩年、病に倒れた坂本は郷里の北海道に戻って家族の看病を受ける。北海道には兄、直行が存命だった。直行は山岳画家や随筆家としても有名で、坂本はそんな兄を敬愛していた。系譜を遡れば幕末の志士、坂本龍馬の子孫にあたる兄弟でもあった。

札幌に桜が咲き始めるころ、坂本は不帰の人となる。昭和五六年五月四日、享年七三歳。東北大生協を巣立った多くの教え子に見送られての旅立ちだった。